

発表題目：

## 時空間に分散する記号：フィジーのろう者の手話コミュニケーションの事例から

所属：人間文化研究機構／京都大学

氏名：佐野 文哉

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表の目的は、フィジーのろう者による言語実践を「分散した言語 (distributed language)」の観点から分析し、人、モノ、環境に分散してインタラクティブに成立する手話コミュニケーションのあり方を具体的に明らかにすることで、従来の手話研究や言語人類学の議論を再考することである。

1960 年代に手話が自然言語の一つであることが言語学的に解明されて以来、手話は人間の言語コミュニケーションの多様性を考察するうえで不可欠な研究テーマとなった。一方で、従来の手話研究の多くは、欧米のろう者コミュニティを対象としたものであり、非西洋社会、とくにフィジーを含むオセアニア島嶼域の手話やろう者コミュニティを対象とした研究はほとんどない。

発表者が調査対象とするフィジーのろう者が用いるフィジー手話は、オーストラリアやニュージーランドのろう教育で使われるオーストラリア手話英語を原型とする手話である。現在のフィジーの民族構成は大きく先住系とインド系に分けられ、音声言語話者の場合、基本的に各人の民族的背景に応じて異なる母語が使用されるが、多様な人びとが在籍するろう学校やスペシャルスクールで伝承されるフィジー手話は、フィジーのろう者によって民族を問わず使用されている。

本発表では、フィジーのろう者がフィジー手話を中心とするさまざまな記号的資源を使用しながら、いかに周囲の他者とコミュニケーションを交わしているのかを分析するが、その際、とくに手話の物質的な側面に注目して考察を行なう。手話という言語の重要な特徴は、それが話者の手指を含む身体全体で物理空間上に表現される視覚-空間言語 (visual-spatial language) だという点である。黎明期の手話言語学では、手話が言語学の研究に値する「真正な言語」であることを証明するために、ジェスチャーとの差異や音声言語との類似性が強調され、現在でもそうした傾向が強くみられるが、音声言語とは異なる手話の物質的特徴は、人間のコミュニケーションの多様性を検討するうえで看過できないポイントである。

以上の問題関心をふまえたうえで、本発表で参照する視座が分散した言語である。分散した言語とは認知科学や文化人類学で提唱された「分散した認知 (distributed cognition)」の知見や、応用言語学で提唱された「ランゲージング (linguaging)」の知見などをもとに提唱された理論であり、その特徴は、人間の言語を話者個人の認知システムに閉じたものではなく、周囲の環境や他者に分散してインタラクティブに成立する開放的なシステムとして捉える点にある。分散した言語の研究は、これまで主に音声・書記言語を対象に行なわれてきたが、この観点は手話コミュニケーションの分析にも有用であり、従来の手話研究が看過してきた側面に焦点をあてるものである。

そしてそれはまた、狭義の言語能力でははかれない、ことばの使い方の社会文化的な知識を含む「コミュニケーション能力」の解明を行なってきた言語人類学にも新たな知見を導入するものである。本発表では、環境に潜在するアフォーダンスやその場に共存する他者が手話コミュニケーションにおいて不可避に参与していることを示すことで、一人の人間の「能力」という観点では捉えられない、環境や他者に分散して成立するコミュニケーションのあり方を提示し、言語人類学の知見を再考する。